

# モンテッソーリ・メソッドにおける歌唱活動の特徴

— A.M. マッケローニの音楽教育に着目して —

藤 尾 かの子

(2016年10月6日受理)

Features of Singing in the Montessori Method:  
The Musical Education of Maccheroni

Kanoko Fujio

**Abstract:** Maccheroni worked with Montessori throughout her professional life, and was a major contributor to the development of musical education in the Montessori method. The current study aimed to distinguish the characteristics of singing in the Montessori Method through an examination of documents written by Maccheroni. Our analysis revealed four main components of singing education in the Montessori method: 1) The use of singing as a daily activity; 2) The development of singing techniques; 3) Developing an understanding of the elements of music; and 4) Learning ways to express oneself through the development of artistry. Overall, our results revealed several distinctive features of Maccheroni's method of singing education, as a way of teaching children to express themselves through the unique worldview of their own music.

**Key words:** Montessori Method, A.M. Maccheroni, singing, music education

キーワード：モンテッソーリ・メソッド、マッケローニ、歌唱活動、音楽教育

## 1. 研究の背景と目的

19世紀末から20世紀初頭にかけて、「子どもを中心に」というスローガンのもと、新教育運動が活発化し、それは音楽教育界にも影響をもたらした。この児童中心主義的な教育思潮の中、20世紀初頭にヨーロッパを中心として普及した幼児・児童を対象とする音楽教育として、リズム活動や即興演奏を扱うダルクロワーズの教育方法が挙げられる。その後次第に、オルフやコダーイのコンセプトに基づく音楽教育の方法など、幼児・児童を対象とする独自の音楽教育が開発されていった。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：三村真弓（主任指導教員）、七木田教、丸山恭司

このような教育界における大きな転換期とも言える時期に、モンテッソーリ（Montessori, Maria 1870-1952）によって考案されたモンテッソーリ・メソッド（以下、メソッド）は、1907年にイタリア・ローマで初めて開設された「子どもの家」での実践が世界的に脚光を浴びることとなった。自明のことながら、モンテッソーリは音楽家ではなかったため、メソッドにおける音楽教育の大部分は、彼女の生涯にわたっての協力者であるマッケローニ（Maccheroni, Anna Maria 1876-1965）とバーネット（Barnett, Elise Braun 1904-1994）によって考案・発展された。とりわけマッケローニは、1907年の「子どもの家」創設期から、モンテッソーリの晩年に至るまで、モンテッソーリの協力者としてメソッド全体の発展にも寄与したため、決して看過することはできない重要な人物の1人である（Kramer, 1976 平井久監訳1981, p.15）。マッケローニは晩年の1950年代に、長年にわたる音楽活動の実践を

基に、おおよそ50冊もの音楽指導書を編纂した。これらの中でも、幼児期の基礎的な音楽指導書である *Orecchio, voce, occhio, mano* では、歌唱活動がモンテッソーリ教具の〈音感ベル〉<sup>1</sup>の活動に連動して取り入れられている。加えて、全6冊から成る幼児と児童を対象とする音楽指導書の *Music Book* では、それら全てにおいて歌唱活動が導入されている。これらから、マッケローニの音楽指導法では歌唱活動が大きなウェイトを占めていると言える。

しかしながら、わが国におけるメソッドの受容を振り返ると、1912年に紹介されてから現在に至るまで、メソッドを構成する4分野の「日常生活」「感覚」「言語」「数」が主に取り沙汰されており、メソッドを実施している大多数の保育園および幼稚園では、〈音感ベル〉を用いた活動の実践のみに留まっているのが現状である。そのため、本来ならば〈音感ベル〉の活動に伴って行われるはずの歌唱活動は、分離した形で導入されている。その主たる要因は、わが国のモンテッソーリ教師養成コースにおいて、音楽がその他の分野と比較してほとんど教授されていないことに起因する。

一方、アメリカやヨーロッパなどの諸外国では、国際モンテッソーリ協会（以下、AMI）の主催のもと、マッケローニの教えを引き継いだ弟子達によって音楽の教授がなされており、世界的規模での広がりを見せている。すなわち、わが国は、その他の国と比較して、メソッドにおける音楽教育だけがとりわけ根付いていないという状況なのである。

マッケローニの音楽教育に関する先行研究として最も包括的なものが、Miller (1981) である。しかし、モンテッソーリとマッケローニの第一次史料を取り扱うことによって、メソッドにおける音楽カリキュラムの内容をほぼ網羅しているが、彼女らの音楽教育論については十分に語り尽くされているとは言い難い。また、マッケローニの史料に関しても、全ては検討されていないため、歌唱活動の全貌も解明されていない。モンテッソーリ自身も、メソッドは単に方法論を意味するものではなく、教育思想およびそれを基盤として構築された教育方法論から成る体系化された1つの教育システムであることを常に強調してきた。したがって、これからのわが国の幼児音楽教育において、メソッドの音楽教育が果たす役割を論じるときに、彼女らの理念的部分を含めて、どのような音楽教育であるのかを明確にすることは重要な作業となってくるであろう。

以上のような前提に立ち、本研究では、メソッドにおける音楽教育の発展に多大に寄与したマッケローニの音楽教育の中から、歌唱活動に焦点を当てる。先述

したように、マッケローニの考案した歌唱活動は〈音感ベル〉の活動と連動しているため、〈音感ベル〉の活動を取り入れているわが国のメソッド実施園に、今後の音楽教育の在り方を探るための示唆を与えることができる。本研究では、マッケローニの音楽教育の理念を述べることから始め、彼女の考案した音楽教育の全体像を概観した後に、歌唱活動の内容、教具・教材の配置、指導法の視点から、歌唱指導の全貌を明らかにし、その特徴を考察する。

## 2. マッケローニの音楽教育理念

マッケローニの歌唱指導法は、方法論だけを指すのではなく、彼女の音楽教育理念の上に成り立っている。したがって、彼女が幼児期の子どもの音楽教育をどのように捉えていたか、正確に理解することから始める。

マッケローニは、幼児期の子どもに見られる音楽的な発達の特徴として以下の2点を挙げている。1点目は、幼児期の子どもはメロディー全体を聴きつつも、音楽の要素に着目する傾向が見られることである。これについて、「(3〜5歳の) 年令の低い子ども達は、音楽的な言語に非常に興味を持つということが(実践を通して) 証明されてきた。」(Maccheroni, nd-6, p.3) と述べている。ここで言う「音楽的な言語」(Musical Language) とは、音階を構成する音、終止、拍、拍子、リズムなどの、音楽の構成要素を意味する。2点目は、「子ども達は教師の説明によって音楽を学ぶよりも、自分自身で観察することを通して理解を深めていく。」(Maccheroni, nd-6, p.37) ことである。これら2点の記述から、幼児期の子どもはただ単に音楽を聴き流すのではなく、音楽の構成要素を自発的に捉えながら聴いていると特徴付けていることが分かる。

また、音楽に対する子どもの興味・関心の実態として、マッケローニは、「全ての子どもが音楽に興味を示すわけではない。そのような子どもにとって、自分が活動する場に音楽的な学習環境が設定されていることは、他の子どもが自発的に音楽活動に取り組む姿を見たり聴いたりすることを可能とするので、早急に教育的な効果が表れなくとも、間接的に良い影響を与える。子どもが音楽に興味を持ち、自発的に音楽活動を進めることは、音楽に関する非常に重要な事実を自分で理解した時である。」と述べている (Maccheroni, nd-6, p.42)。さらに、「子ども達は自分の力で(音楽に関する) 非常に重要な事実を理解するまで、音楽に興味を持つことができないのである。これは全ての学習においても共通して言える。」(Maccheroni, nd-6, p.42) とも述べている。すなわち、教育的な配慮として、

子どもが音楽に興味を示すことを教師は待つこと、および、音楽はその他の活動と同じように、子どもが自分で選択できる活動として導入することが重要であることを示唆している。そしてこれらは、モンテッソーリの教育思想の根底に流れる、子どもの自発性の尊重、および、子ども自身で活動を選択する自由を重要視するという児童中心主義の理念に一致している。

以上のような理念を中核として、マッケローニの音楽教育では、子どもが教具・教材を用いながら、音の高い・低い、音の長い・短い、などの細分化した音楽的要素を段階的に捉えさせるための体系的なシステムを構築した。音楽指導法について具体的に言うと、子どもが特定の音楽要素を初めて学習する段階では、それに一致する言葉は提示されず、動いたり声を用いたりすることで、あるいは耳を傾けて聴くことで、「感覚的に捉えさせる」ことが徹底されている。その根底には、「早期教育では、子ども自身が理解している物事の意味や知識に基づいていない言語表現が教えられる。この方法を用いることは、子どもを、『知識が着実に身に付いている』という混乱や錯覚へと陥らせる。」(Maccheroni, nd-6, p.42) という、知識重視の教育に対する、マッケローニの批判的な見解が据えられている。彼女は、「3歳から5歳の幼児期は、教師による適切な援助のもとで（音楽に関わる）感覚的な刺激を十分に受けると、容易に、そして正確に音楽を学ぶことができる。」(Maccheroni, 1955, p.11) と述べており、幼児期の学習方法としては、感覚的な学びが最重要であることを主張している。そして、このような感覚的な学習を基点とした上で、感覚から捉えた音楽的要素に、言葉を一致させることの重要性を説いている。この意図は、「子ども達が自己表現するためには、音楽に関する正確な言葉を教えることが重要である。」(Maccheroni, nd-6, pp.11-12) という論述から読み取ることができる。すなわち、音楽の要素を感覚的に捉えさせた後で、それに一致する音楽用語（音階を構成する音名、音の長さの名称、終止形など）を教授する方法を確立することによって、音楽に関する確かな感覚と概念をもとに、子どもが音楽で自己表現することが最大の目的として掲げられている。

では、マッケローニの言う「自己表現」とは、どのような活動を指すであろうか。マッケローニの音楽教育のカリキュラムには、活動の全てのプロセスを子ども達が自力で進めていき、自分たちで考えて創作していくような、作曲や音楽劇が配置されている。要するにマッケローニは、子どもが活動を通して習得した正確な音楽理論と、歌唱や演奏を含む基本的な音楽のスキルを基盤として、このような創造的活動へ至ること

を重要視していたのである。なお、マッケローニは、このような創作活動に限らず、音楽鑑賞も重要な活動として位置付けている。音楽鑑賞では、楽曲をただ単に感覚的に聴くのではなく、先述の「音楽的な言語」を基準としながら論理的な思考を働かせることによって、メロディーが内包している固有の世界観を感じ取るレベルにまで達することを目的として掲げている。

### 3. マッケローニの音楽教育の全体像

上記の目的を果たすために、マッケローニは段階的な音楽カリキュラムを考案した。先述したように、歌唱活動はこのカリキュラムの中で、その他の様々な音楽活動と連動しているため、マッケローニの音楽教育全体を把握する必要がある。

マッケローニの音楽教育の全体像は、全6巻から成る音楽指導書の *Music Book*、および、その補足的な解説が述べられている *The Montessori Method: Music and the Child* を読み解くことで明らかになる。これらの著書は、マッケローニの幼児期から児童期にかけての音楽カリキュラムの全体像を把握することに有益である。

これら6冊に示されている活動項目は、「①静粛の練習」、「②音高の学習」、「③音価の学習」、「④リズム活動」、「⑤歌唱」、「⑥記譜・読譜」、「⑦音楽理論」（音階の構成について・移調の方法など）、「⑧音楽鑑賞」、「⑨演奏」、「⑩音楽劇の創作」、「⑪作曲」である。「①静粛の練習」は、文字通り、音を極力立てずに静けさを作り出し、それを体感する活動である。これは音楽活動というよりも、メソッド全体の基盤をなす活動として位置付けられているが、マッケローニはあえてこの「静粛の練習」を音楽教育の基盤に据えることの重要性を強調している。彼女がこのような発想に至った理由は、子どもが音楽的な技術や知識を習得するためには、第一に「音を聴く」姿勢が確立されていることが肝要であり、これ無くして音楽活動は成立しないと考えていたからである。その際たる例として、繊細な音色の〈音感ベル〉を用いた「②音高の学習」が挙げられる。この活動を行うためには、「静粛の練習」を通して「音を聴く」姿勢を培うと同時に、音を聴き分けるための鋭敏な聴覚を育成する必要がある。

「②音高の学習」以降に配置される活動では、「音階」が1つの鍵となる。音階を基準とした学習の意義として、マッケローニは、「子どもは音階を好んで聴く。」(Maccheroni, nd-6, p.32) と述べた上で、「音階は音価と同様、メロディーと切り離して語ることはできない。音高と音程の両方の特性が、メロディーに込められて

いる作曲家の意図を表現するために深く関わる。音階はメロディーをより深く理解するために鍵としての役割を果たす。」(Maccheroni, nd-6, p.36)と述べている。音階を扱う具体的な活動としては、ハ長調の音階を構成する活動を含む〈音感ベル〉を用いた活動から始まり、活動の難易度が高くなると、主として小学校課程で使用される〈トーンバー〉<sup>2</sup>を用いて、全ての音階を取り扱う活動へと進む。これらの教具を用いる活動では、聴くことおよび歌うことを通して、音階構成音の弁別能力や調性感覚の育成が目指される。さらに、これらの活動に連動して、「⑤歌唱」、「⑥記譜・読譜」、「⑦音楽理論」が行われ、歌唱の基礎的なスキルの育成や、音楽の理論的知識の習得も目指されている。

このようにして習得された技術や知識は、「⑧音楽鑑賞」、「⑨演奏」、「⑩音楽劇の創作」、「⑪作曲」など、子ども達に論理的な思考を働かせることが求められるより複雑な活動において、必然的に生かされる。ただし、作曲の在り方に関して、マッケローニは、「子ども達は、自分の曲を作曲するように教師から指示されることはない。(中略)彼らが自ら進んで作曲する時がやってくる。」(Maccheroni, nd-6, p.41)と述べていることから、作曲それ自体の具体的な方法を提示するというよりは、それに至るまでのプロセスを重視していたと言える。「⑧音楽鑑賞」に関する活動は、「コンサート」と呼ばれるプログラムに含まれている。コンサートでは、感情、雰囲気、動物などをテーマとして扱う、標題音楽的な要素を有する楽曲が使用される。この活動の進め方としては、楽曲が演奏されるまで曲に関する情報は子ども達に与えられず、鑑賞後に子ども達が自発的に発する言葉を中心として、楽曲に対する理解を深めていくというような能動的な方法が採用されている (Maccheroni, nd-6, pp.42-43)。

このように見ると、音楽鑑賞や創作的な活動へと至る学習のプロセスにおいて、音楽要素の理解に力点が置かれているように思われる。しかし、声・動き・演奏を通して、歌唱や身体表現のための技術を習得することに加えて、教師と子どもがコミュニケーションをとりながら、楽曲を解釈することも目指されている。すなわち、マッケローニの音楽教育は、感覚的・活動的・主体的な活動を通して、音楽的要素の認知的側面と技術的側面の育成のみならず、子どもの思考力およびコミュニケーション能力を高めることによって、将来的に子どもが創作活動や楽器演奏を行うことや、音楽的要素に目を向けながら論理的に作曲家の意図を汲み取って音楽鑑賞をする力の育成までが目指されているのである (Maccheroni, nd-6, pp.41-42)。

以上のようなマッケローニの音楽教育は、同時期に

考案された音楽教育と比較して、幼児期から児童期にかけて教具・教材を用いて音楽の諸要素を学ぶ活動が段階的に配列されている点、および、これらの音楽活動は日常の活動の中で子どもが自己選択できるように導入されている点において特徴付けられる。

## 4. マッケローニの歌唱指導

### (1) マッケローニの歌唱論

マッケローニは、幼児期における歌唱の導入の在り方について、次のように述べている。「乳児が成長する過程で話し始めることは、話すことを大人が直接的に教えるからではない。乳児は周囲の人々が話しているのを聞いて、自然と話し始める。これと同じことが歌うことにも言える。私たち教師は、子ども達に歌うことそれ自体を教えることはできない。ある人が母音「O」を用いて異なる高さの音を歌う姿を、1歳に満たない乳児が見ていた。するとその乳児は、すぐにその人と同じ母音を用いて同じ音の高さで歌った。このことから、音を聴くことが、話すことや歌うことの適切な準備となることは明らかである。それゆえ、〈音感ベル〉の活動は、子どもが耳を鍛えるのと同様に、声を鍛えるためにも適切な準備となる。教師は〈音感ベル〉の音を聴き分けて、同じ音高の〈音感ベル〉を対にする方法を子どもに見せると同時に、〈音感ベル〉の音高に合わせて柔らかな声で歌うことも見せる。多くの場合、このような教師の姿を見ても、子どもは歌わない。しかし、教師が〈音感ベル〉を用いながら歌う間、子どもは教師に興味深く見る。(たとえ子どもが歌わないとしても、)子どもに歌うように指導すべきではない。なぜなら、子どもは教師の歌う姿を見るということを契機として、自分自身で歌い始めるようになるからである。」(Maccheroni, nd-6, pp.9-10)

上記の論述から明らかなように、マッケローニの歌唱活動の導入では、子どもは教師が歌っているのを「聴く」ことを最重要としている。しかし、これは放任的な活動形態ではない。マッケローニは、個々の子どもの興味・関心や発達段階によって歌い始める時期は異なると認識した上で、〈音感ベル〉の活動は、子どもが音を感覚的に捉え、記憶することにも有用であるので、例え歌わないとしても、正確な音高で歌い始めるための間接的な準備活動として価値付けているのである。

したがって、マッケローニの歌唱活動の根本的な在り方としては、子どもが自発的に歌うことを最重要とする理念が徹底されていると言える。これを踏まえた上で、マッケローニの音楽教育では、歌唱は、音楽的

要素の理解へと導くための手段と、自己表現の手段という2つの側面を持つ。音楽的要素の理解へと導く手段としての歌唱は、音価の学習を事例として述べると、4分音符や8分音符など、音の長さに合わせて動くことと同様に、それを歌うことも、それぞれの音価の理解へと導くことに有効であるとされている (Maccheroni, nd-6, p.23)。つまり、聴くことだけに限定して音の長さを捉えさせるのではなく、動作や声を通して体験的に捉えさせることで、音価をより強固に理解させることが図られていると言える。一方、自己表現の手段として用いられる歌唱は、子ども達が主体となって創作していく音楽劇や歌唱発表会の事例に見られる。音楽劇について、彼女は、「(それまでの活動を通して培った歌唱力やその他の能力を応用しながら、) 子ども達は自分達のインスピレーションの全てを表現しようとする。」 (Maccheroni, nd-6, p.29) と述べており、歌唱発表会については、「子ども達は歌曲や子どもの歌の楽譜を自ら進んで読み、それを良い言葉の発音と生き生きとした表現で演じる。」 (Maccheroni, nd-6, p.47) とも述べている。

上述のような音楽教育としての歌唱以外にも、歌唱は、日常の保育の中で取り扱われており、3歳から5歳

の子ども達には、讃美歌や子どもの歌を歌う時間を設けることも重要視されている (Maccheroni, nd-6, p.6)。ただし、このようなメソッドの音楽教育の枠から外れた歌唱活動の捉え方に関しては、それ程詳しく記述されていない。

(2) 歌唱活動の内容

次に、マッケローニの音楽指導書の中から、とりわけ歌唱が取り扱われている、幼児を対象とした *Orecchio, voce, occhio, mano*、ならびに、幼児から児童を対象とした全6巻から成る *Music Book* に焦点を当て、歌唱活動の内容、指導法、教具・教材配置の視点を検討することを通して、マッケローニの歌唱活動を明らかにする。

① *Orecchio, voce, occhio, mano* における歌唱活動の内容

*Orecchio, voce, occhio, mano* は、文字通り、子どもが「耳、声、目、手」を全て使用しながら、音を聴き分ける耳、美しい歌声、楽譜を読み取る目、楽器を演奏する手を育成することを目的として作成された。そして、その手段となる主要な教具として、〈音感ベル〉が取り扱われている。以下の表1は、この指導書に見られる歌唱に関連する活動内容をまとめたものである。

表1 *Orecchio, voce, occhio, mano* にみられる歌唱に関連する活動内容

活動項目	活動内容
(1) 静粛の練習	教師が黒板に書いた「静粛」(silent)の文字を見て、子ども達はクラスの中で静けさを作る。クラスの中には、自分の活動を続ける子どももいるが、静粛は良い効果をもたらす。
(2) 1つの音	1つのベルを耳の近くで握り、繰り返しその音を聴く。音の振動が、静粛の中へと完全に消えていくことを感じる。
(3) 音階	ハ長調の音階の上行形・下行形を聴く。この活動は、何度も繰り返し行われる。
(4) 同一の音を合わせる	①操作と確認用のベルの中から、それぞれ (do) と (sol) のベルを取り出す。②操作用ベルで (do) を鳴らしながらその音高で母音「o」で歌い、確認用ベルの (do) を見つけてペアにする。これと同様の方法で、(sol) のベルを合わせる。③再び、(do) のベルをたたきながら「これらは同じ音です。」と言う。(音高を子どもが容易に聴き分けることができるように、音高に差のある2つのベルを初めに取り扱う。)
(5) 音と音名を一致させる	①教師は (do) のベルを鳴らし、その音高で「これは (do) です。」と歌う。(sol) も同様にして行う。これを何度か繰り返す。②教師は、(do) の音高で「(do) をください。」と歌う。子どもは、音を聴き分けて、(do) のベルを差し出す。(sol) も同様にして行う。③教師は1つのベルを鳴らして、「これは何ですか?」と尋ねる。子どもがその音名を答える。(以上と同じ方法で、その他のベルでも活動を行う。)*子どもが文字を読むことができる場合には、図1に示す音符を象った円板を使用して、視覚的に音名を示す。
(6) 五線譜	①図2の五線譜を提示し、へこみ部分に円板を置く方法を確認する。② (do) の円板と、(do) のベルを取り出す。③ (do) のベルを鳴らしながら、それと同じ音高を音名 (do) で歌う。その間に、(do) の円板を、五線譜上の (do) のへこみに置く。*ハ長調の構成音をこれと同様の方法で扱う。
(7) 声	ベルでハ長調の音階を鳴らしながら、各々の音を、母音「o」を用いて優しく歌う。使用される音階は単純な形が好ましい。この活動は毎日行う。
	子どもの名前や挨拶ことばを用いて、ハ長調の音階に乗せて歌う。(譜表1, 2)
	会話調の単文を、音高の離れた2つの音に乗せて歌う。例: 質問に対して答える。(譜表3)
	①それぞれの音を母音で歌う。②全て同じ音高で、詩の行全体を歌う。(譜表4)
(8) 音階を構成する	無秩序に配置されているベルの音を耳で聴き分けながら並べ替えてハ長調の音階を構成し、それを歌う。
(9) 黒い円板	黒い円板 (図3) を五線譜上に自由に置き、それを歌う。

藤尾かの子

(10) チャート	教師がチャート（譜表5）の音をベルで鳴らす。子どもはその音を記憶し、一致するチャートを選ぶ。 ※チャートはNo.1から17までである。 チャートを見て歌う。ベルやピアノを伴奏にして歌う場合と、伴奏を付けずに歌う場合がある。
(11) 歌を記譜する	①教師は、子ども達がすでに何度も歌ってきた「私たちの歌」を提示する。②子ども達はベルでこの歌を演奏する。→メロディーの確認。③演奏することができた子どもは、ベルでその歌を演奏して歌う。→メロディーと歌詞の確認。④五線譜と黒い円板を準備する。⑤教師は、「私たちの歌」の初めの2つの音だけを演奏する。⑥教師：「これらは何の音ですか？」子ども：「これらは（sol）と（mi）です。」⑦五線譜の（sol）と（mi）の位置に円板を置く。⑧教師は新たに2つの音（sol）（la）を加えて演奏する。⑨⑦と同様、円板を置く。このようにして、歌の終わりの音まで同じように続ける（譜表6）。⑩教師は、子どもが作成した（譜表6）を演奏する。⑪子どもは、その演奏の音の長さが、記憶している歌と異なっていることに気付く。⑫教師は、音価の長い音符の後は、広くスペースをとる。さらに、必要に応じてアクセント記号を置く（譜表7）。⑬教師は、（譜表7）と同様の形式で「私たちの歌」を記譜し、五線譜の下に歌詞を書く。これ（譜表8）は、子ども用の記譜用ノートの表紙となる。 ※子どもは（譜表9）を見て歌う。これらの活動は、歌詞を伴う視唱の練習である。
その他	長音階—半音階 ①教師は、ベルでハ長調の音階を演奏した後、それが「長音階」であることを子どもに伝える。②その後、（mi）（la）の音程を半音下げ、ハ短調の音階を演奏する。それが「短音階」であることを子どもに伝える。③子どもは、五線譜の板にハ長調の音階を構成した後、ハ短調の音階を構成する。④教師は2つの音階をもう一度演奏し、子どもはそれらを歌う。
	和音 ①教師は、ハ長調のI度の和音をピアノで演奏する。②この和音のそれぞれの音を、3人の子どもが同時に歌う。（do）（mi）（sol）

(Maccheroni, 1955, pp.12-31. をもとに筆者作成。)

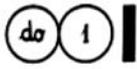


図1 円板

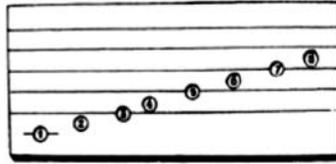


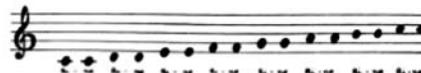
図2 五線譜の板



図3 黒い円板



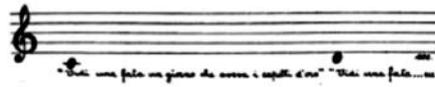
譜表1 子どもの名前



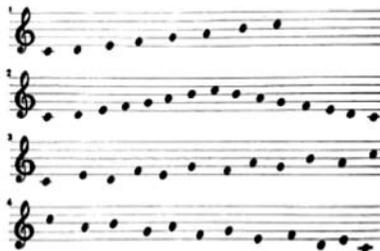
譜表2 挨拶ことば



譜表3 会話調の単文



譜表4 詩



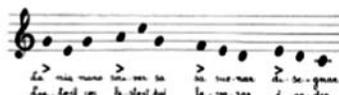
譜表5 チャート



譜表6 「(11)紙に書かれた歌」①



譜表7 「(11)紙に書かれた歌」②



譜表8 「(11)紙に書かれた歌」③



譜表9 「(11)紙に書かれた歌」④

(Maccheroni, 1955, pp.9-22. より転載。)

表1を概観すると、歌唱活動の基盤には、静けさを体験し、集中力を身に付けることが目指される「(1) 静粛の練習」が据えられており、それ以降に配置する活動は、〈音感ベル〉を主要な教具として扱いつつ進めていく。「(2) 1つの音」および「(3) 音階」は、音感ベルの個々の音や、ハ長調の音階の音を聴くことに焦点化されており、声の要素は取り入れられていない。

一連の活動プロセスにおいて、声の要素が初めて取り入れられる活動が、「(4) 同一の音を合わせる」である。この活動では、〈音感ベル〉から再生されるハ長調の構成音を、母音「O」を用いて同じ音高で歌うという、いわゆるピッチマッチングが行われる。母音を用いることは、「柔らかい声で歌う」(Maccheroni, nd-6, p.10) ことに有用とされている。次の、「(5) 音と音名を一致させる」では、(4)の活動を通して子どもの内面に蓄積されている音高感覚に、音名を一致させることで、音名唱をすることが目指されている。「(6) 五線譜」で、記譜・読譜が導入される。ここでは、それまでの活動を通して培われた音高感覚を基準として、音名唱をしながら音符を五線譜上に表していく。取り扱われる音は、ハ長調の音階構成音に限定されている。これら、(4)から(6)の活動を通して、固定ド唱法で歌う力、および視唱力を習得することが目指される。

歌唱の技術面の向上に焦点が当てられた活動が、「(7) 声」である。ここでは、音楽的な美しい声で歌う、1つの音高を保ちながら歌う、音高の離れた2つの音を正確に歌う、という3点が目指されている。この活動の特徴としては、①子どもの名前や挨拶言葉など、子どもが親しみを持つ言葉を使用している、②同じ言葉を繰り返し用いている、③メロディーに言葉のリズムが一致している、④メロディーに使用される音をハ長調の構成音に限定している、⑤順次進行から始めて徐々に飛躍進行へと移行している、という点が挙げられる。

「(8) 音階を構成する」では、自分の感覚と声だけを頼りに、〈音感ベル〉でハ長調の音階を構成することを通して、音階として音を正確に捉えることが目指されている。

「(9) 黒い円板」は、作曲の要素も取り入れられた活動である。活動の流れとしては、子どもが思考しながら五線譜に音符を並べて曲を作り、それを歌う、と記されている。つまり、この活動は、作曲の導入的な役割を果たしていると同時に、記譜・読譜力の強化と、声で表現する力を培うことも目指されている。

「(10) チャート」では、音を記憶すること、および

視唱力の育成が目指されている。「(11) 紙面上の歌」では、次の3点の特徴が見られる。1点目は、段階を踏んだ指導が計画されていることである。まず初めに、①〈音感ベル〉を用いて、メロディーを感覚的に捉えさせた後に、②メロディーと歌詞を一致させ、③それを少しずつ楽譜に書き表す、と示されていることから、1つの内容に焦点化した、順を追った指導展開であると言える。2点目は、視唱用の楽譜に工夫が凝らされていることである。一般的に、歌唱用の楽譜では、譜表8のような楽譜が用いられるが、これは音と歌詞を同時に目で追うことが要求されるため、幼児にとって難易度が高い。それを回避するために、譜表9のように歌詞を音符に見立てて五線譜に書き入れ、視唱の困難性を緩和するような工夫が見られる。3点目は、音高のみならず音価の要素も取り入れた記譜・読譜力の育成が目指されていることである。この活動以前は、音高に主眼が置かれた記譜・読譜法であったが、譜表7に示すように、2分音符は4分音符の2倍のスペースをとるなどして音の長さを表す。これは、実際の音価を扱う前段階の練習として機能する。

その他の活動としては、短調の音階を構成した後、それを記譜して歌う活動や、和音を歌うことを通じて、和声感覚を身に付ける活動が示されている。

以上に述べた全ての活動に通底する指導法の留意点として、マッケローニは、「教師は、子ども達に大きな声で歌うように言うてはならない。もしそのように言うと、子ども達の声が無声になるだろう。この点を教師が配慮することで、子ども達は恥じらうことなく歌うようになる。子ども達は少しずつ、1人または他者と共に歌う習慣を身に付けていく。その結果、彼らにとって歌うことは自然な活動となっていく。」(Maccheroni, nd-6, p.10) と述べている。

## ② Music Book における歌唱活動の内容

次に、全6巻から成る Music Book およびその解説書である *The Montessori Method: Music and the Child* をもとに、マッケローニの歌唱に関する活動を概観していく。Music Book の各々のタイトルは、1. *The First Book*, 2. *Value of Notes*, 3. *Major Scales*, 4. *Minor Scales*, 5. *Melody*, 6. *A Musical Reading*, と題されており、1巻から6巻にかけて順を追って進められていく。以下の表2は、各々の冊子別に、活動内容の概要、教具・教材の配置を示している。歌唱に関わる箇所には網掛けをしている。なお、活動内容の概要に付けている番号は活動の配列を、目指される音楽的なスキルに付けている番号は習得していく音楽のスキルの順序を示している。

表2から、全ての冊子で歌唱が用いられていること

が読み取れる。具体的に言えば、1. *The First Book* は、音感ベルを主要な教具として取り扱っており、前述の *Orecchio, voce, occhio, mano* と比較して、歌唱の取り扱いに関して大きな相違点は見られない。ただし、

グループ活動においては、全ての活動において歌唱が扱われている。ここでは、他の子どもの声を聴いて自分の声を合わせていくピッチマッチングの力、および、内的聴取力を培うことが目指されている。2. *Value of*

表2 Music Book における歌唱活動の内容

巻数	活動内容の概要	習得すべき音楽的スキル	教具・教材
1	①静けさを感じる（前段階の練習）	①音を聴く姿勢、集中力、自分の動きの調整	音感ベル 五線譜板（ト音譜表とヘ音譜表） 音符の玉 音階の音程を捉える表 音符の書いてあるカード ボード 記譜用ノート
	②音高の弁別（ハ長調の音階構成音）	②音高弁別能力（高・低→漸次性）	
	③同じ音高で歌う （ハ長調の音階構成音）	③基礎的な歌唱力（聴き取った音を同じ音高で歌う、柔らかな声で歌う）	
	④記譜／読譜→視唱	④記譜・読譜力（音階を読み、それを歌う）	
	⑤ハ長調の音階に関する理論	⑤音階に関する理論的知識（音程や機能相和）	
	⑥変化記号	⑥＃・♭の役割を知る	
	⑦長音階と和声短音階の音程関係の観察	⑦ハ長調とハ短調の音階の違いが分かる	
	⑧和音・アルペジオを歌う／聴く	⑧正確な音高で歌う・和声感覚の育成	
	エクササイズ（グループ活動） ①子ども達全員で同じ歌を歌う→1人ずつ独唱で順番に歌っていく。（模倣） ②ハ長調の音階構成音を、伴奏なしで、1人ずつ1つの音を順番に歌っていく。 ③3人でハ長調の1度の和音構成音を歌う。（do-mi-sol.） ④母音もしくは2音節の言葉を用いて、ハ長調の音階構成音を2音ずつ歌う。 （例：do-do.re-re.mi-mi.fa...）→1音ずつ増やして行う。→伴奏を付けた後に、伴奏を付けずに自分の感覚を頼りに歌う。※①～④の活動をハ短調でも行う。	①音を記憶する・人の声を聴いて同じように歌う ②正確な音高と音価で歌う ③和声感覚の育成 ④言葉と音を一致させて歌う・自分の音の感覚を基準として歌う	
2	①音階や曲を歌う／音の長さに合わせて動く（1つの活動で1つの音価）	①音価の感覚、視唱能力および身体表現のための基礎的能力	音符カード・音符カードを貼るボード・記譜用ノート・トーンバー 【トライアングル】 《音階がベースとなっているメロディー》 《著名な作曲家の曲》
	②教材を用いて音価を構成する	②音価の表記の習得	
	③作曲し、その曲を演奏する	③作曲力の育成／表現する力	
	④音楽鑑賞・コンサート ／音楽・物語・踊りを含む創作活動	④鑑賞能力、さまざまなジャンルの音楽を知る ／グループ活動による創作能力	
3	①長音階を構成する	①調性感覚の育成と記譜・読譜力の向上	トーンバー・音階の音の並びを捉える板・移調用のカード 【鍵盤楽器】 《子どもの歌》《音階》 《音階がベースとなっているメロディー》
	②長音階における移調の理論	②調性感覚の育成と移調の理論的理解	
	③長音階の構成音の役割の理論的学習	③長音階の構成を聴覚と視覚から理解する／変化記号を用いた高度な記譜・読譜力の育成	
	④短いメロディーを移調して演奏する→記譜	④移調の理論を演奏に生かす／記譜・読譜力の育成	
	⑤メロディーの記憶→記譜	⑤調性感覚の育成／記譜・読譜力および記憶力の育成	
※上記全ての活動を進めていくにあたり、必要があれば音階を歌う。			
4	3巻と同じ活動（①から⑤）を、自然的短音階・和声的短音階・旋律的短音階を用いて行う。	3巻の①から⑤の音楽的スキルと同様。	3巻と同様の教具・教材を用いる
	②自分で創った曲（または既存の曲）を移調する	②作曲能力の育成／移調の理論を作曲に生かす力の育成	
	※上記全ての活動を進めていくにあたり、必要があれば音階を歌う。		
5	①小節のアクセントを表現する	①拍子感の育成と拍子の表記法を学ぶ	トーンバー・音符カード【打楽器】【鍵盤楽器】 《様々な拍子で示された音階》《リズム譜》《著名な作曲家の曲》 Haydon, Mozart, Schubert, Wagner, Chopin, Strauss, Beethoven
	②異なる拍子の音階を歌う	②拍子感と調性感覚の強化／歌唱力の育成	
	③フレーズ・終止形・和音の機能を聴き分ける	③フレーズ・終止形・和声感覚の育成	
	④メロディーの構成を捉える →表情の付け方を考える	④音楽鑑賞能力・表現能力の育成	
	⑤読譜・音楽鑑賞	⑤装飾音の効果とその表記法を知る／作曲家の表現の意図を読み解く	
	⑥曲のアレンジ／作曲→演奏	⑥曲のアレンジ力・作曲能力の向上→演奏技術・演奏表現の育成	

モンテッソーリ・メソッドにおける歌唱活動の特徴  
 — A.M. マッケローニの音楽教育に着目して —

6	①歌詞と音が一致していることを確認する→歌詞とメロディーの関係	①フレーズ感の育成／歌唱の基礎的能力の育成	音符カード 《子どもの歌》 《民謡》 《著名な作曲家の曲》 Beethoven, Strauss, Mozart, Rossini, Puccini, Gounod, Adam ※上記3つのジャンルの曲の楽譜が使用される。
	②歌のアクセントの位置	②拍節感の育成／歌唱の表現方法を学ぶ	
	③メロディーに歌詞を付ける→歌う	③言葉の抑揚とメロディーの一致／作曲の基礎	
	④Beethoven 作曲《Rondo》の簡易楽譜に音楽的な表情を付けていく	④音楽の表現方法の習得	
	⑤曲の形式を崩さずにアレンジする	⑤曲の形式を捉え、アレンジ力を身に付ける	
	⑥曲を読譜する (場合によって、リズム打ちをする。)	⑥調性・曲の構成(反復など)を理解する／リズムを習得する／音の跳躍に込められている意味を読み取る／曲の中心となる音が分かる	
	⑦より複雑な曲の読譜	⑦拍子をもとに、複雑な曲を読み込む／終止形から曲の意図を読み取る	
	<b>エクササイズ</b> ①様々な形式の曲の演奏(伴奏付き) ②4声での合唱(伴奏なし) ③グループで「問い—答え」の形式で歌う(オペラ曲を使用)	①楽譜をもとに、演奏する(鍵盤楽器) ②和声感の育成／人と違うパートを歌う力 ③芸術性の高い楽曲をグループで歌って表現する力を身に付ける	

(Maccheroni, n.d.1・2・3・4・5・6.をもとに筆者作成。)

Notes では、文字通り、様々な「音価」に焦点化されており、それらを感覚的に捉え、概念理解へと導くことが目的とされている。したがって、歌唱はその手段として用いられる。ただし、子ども達が主体となっていく創作活動では、場合によって歌が取り扱われる可能性もある。3. *Major Scales* および 4. *Minor Scales* は、音感ベルの発展的な教具であるトーンバーを主要な教具として取り扱い、長音階と短音階を理論的に理解していくことや、移調の方法を学ぶことが目指されていることから、歌唱はその手段として位置付けられている。5. *Melody* は、メロディーの形成を秩序づけ、音の長短、強弱、拍、拍子、調性、終止形などの様々な音楽的要素の概念、および記譜・読譜力を総合させて作曲することや、音楽鑑賞能力を高めることまでが目指されている。したがって、3・4巻と同様、歌唱はこれらの能力を高めるための手段として取り入れられている。6. *A Musical Reading* では、取り扱う題材として、子どもの歌、民謡、オペラの歌曲、クラシックなど、楽曲の構成が易しいものから複雑なものへと配置されている。それぞれの曲の構成の理解へと導くことを通して、最終的に、子ども達自身が音楽の要素や表現に目を向けながら、歌唱することまでが目指されている。

## 5. マッケローニの歌唱指導の特徴

以上から、マッケローニの考案した歌唱活動は、日常の活動の中で、あるいは音楽教育全体の枠組みの中で、様々な形態をとって存在することが明らかになった。具体的に言うと、①日常生活の中での自然な活動として、②美しい声や正確な音高で歌うための技術面の育成として、③音楽の構成要素の理解へと導くための手段として、④芸術面を深めるための自己表現とし

て、という4つの側面を持つ。

この目的にアプローチするために、歌唱指導法は、以下に述べる3点の特徴を持っている。1点目は、〈音感ベル〉の活動に連動して、歌の要素を取り入れていることである。教師は〈音感ベル〉の活動方法を提示する際、同時にピッチマッチングを行う。しかし、ここで子どもに歌うように指導することはない。このことは、子ども自らが歌い始めることが自然で自主的な行動であり、それを最重要とするマッケローニの理念が反映されていると言える。2点目は、〈音感ベル〉を用いて1人で歌う形態から始まり、徐々にグループ活動を取り入れていることである。このように、活動の中で子どもに意識させる視点を「自分の声」から「集団の中での自分の声」へと徐々に移行させるプロセスが踏まれている点から、子どもの表現の幅を広げようとするマッケローニの意図が読み取れる。3点目は、歌唱活動で使用される言葉は、容易なものから複雑なものへと少しずつ発展していることである。具体的に言うと、①〈音感ベル〉の音に母音「O」だけを用いてピッチマッチングする、②ピッチマッチングを通して感覚的に記憶している音に音名を一致させて歌う。これに連動して、音を五線譜に書き表す方法を学ぶ、③子どもにとって身近で容易な言葉を用いながら、歌あそびをする、④楽譜をもとに歌を歌う、「視唱」へと至る。このように、活動内容が順を追って発展していく点に特徴が見られる。

歌唱に関わる活動の中で扱われている教材としては、長音階・短音階、子どもの歌、民謡、オペラの歌曲が挙げられる。そして、これら4つの中でも、音階が最も基礎的な教材として扱われていることは特筆すべき点である。マッケローニのこの意図は、先述した「音階はメロディーの鍵のような役割を果たす」とい

う彼女の言葉に集約されている。つまり、歌唱・作曲・音楽鑑賞など、楽曲全体を取り扱う活動をこなすためには、楽曲を特徴付ける音階を、子どもが感覚的かつ理論的に理解していることが肝要とされていたと解釈できる。さらに言えば、歌唱活動の題材に様々な国の民謡が取り扱われていることから分かるように、西洋音楽にとらわれることなく、あらゆる楽曲にアクセスすることが目指されているのである。

以上から、マッケローニの歌唱活動は、正確な音程と美しい声で歌を歌うことを目指すといった画一的な枠組みに収まるものではないことが明らかとなった。彼女が歌唱活動を通して育成を試みているのは、個々の楽曲が有する世界観を子ども自身で試行錯誤しながら表現する力、ひいては創造力の育成なのである。これこそが、マッケローニの歌唱活動の特徴であると言える。そして、それを育むために、「音を注意深く聴く」ことを基盤として、歌うことや動くことを通して、細分化・系統化された音楽的要素を体験的に学習するカリキュラムを構築したのであった。

## 6. 本研究の意義と今後の課題

マッケローニの歌唱活動は、〈音感ベル〉の活動に連動して、耳を鍛えるのと同様に、声をトレーニングするための適切な準備として導入されていた(Maccheroni, nd-6, p.9)。それだけではなく、音楽の要素を理解する助けとしての役割も果たしていた。しかし、このように歌唱技術の向上や知識の習得だけが目指された内容ではない。例えば、表1に示したような「問いと答え」や「身近な言葉を使用して歌う」活動は、〈音感ベル〉の活動に連動して、身近な言葉を用いて教師や子ども同士がコミュニケーションを図りながら展開する活動であり、幼児期の子どもの発達段階が考慮された内容であった。

そしてこれらの歌唱活動は、「音楽の専門教育」としてではなく、子どもが日常の活動の中で、自分の興味・関心に即して選択する音楽活動として導入されていた。この点において、彼女の歌唱活動は、教育において個々の子どもの活動のサイクルを最重要とする、モンテッソーリの児童中心主義的な理念が受け継がれている。

以上のように、マッケローニの歌唱指導は、〈音感ベル〉を用いて音楽の基礎的な能力の育成を目指しながらも、同時に、子どもの日常生活に結び付けて展開している。しかし、わが国では、〈音感ベル〉の活動を、「鋭敏な聴覚の育成」を目指す感覚教育の枠組みにおける活動と捉えてきたため、マッケローニの考

案した歌唱活動へと発展していない。モンテッソーリ教育を実施している園において、メソッドに基づく音楽教育の実践を目指すのであれば、〈音感ベル〉を有効的に用いながら展開するマッケローニの歌唱活動に学ぶべき点は多いと考える。ただしそのためには、マッケローニの音楽教育の理念や音楽の具体的な方法を学ぶための教師教育の充実を図ることが必須であると言える。

## 【注】

- 1) C4を基点として、1オクターヴの音域を含む教具である。子どもが操作するためのセットと活動の確認を行うために使用される同一のセットの2つが、組になって準備されている。これらの外見上、全てが同一の形状という特徴を持つため、子どもは聴覚だけを頼りにして活動を行うことが求められる。
- 2) トーンバーは音感ベルよりも取り扱う音域が幅広く、C4を基点として2オクターヴ先のC6までの音が鳴る教具である。このような特徴を有することから、トーンバーは、あらゆる音階を構成することができる。その音色は、木琴を想起させる。

## 【参考文献】

- クレーマー, リタ/平井久(監訳) 三谷嘉明・佐藤敬子・村瀬亜里(訳)『マリア・モンテッソーリー子どもへの愛の生涯』新曜社, 1981. (Kramer, R. *Maria Montessori a biography*. New York: Putnam, 1976.)
- Maccheroni, A.M. *Psicomusica: orecchio, occhio, voce, mano*, n.p, 1955.
- Maccheroni, A.M. *Music Book: The First Book*, np, nd-1.
- Maccheroni, A.M. *Music Book: Value of notes*, np, nd-2.
- Maccheroni, A.M. *Music Book: Major Scales*, np, nd-3.
- Maccheroni, A.M. *Music Book: Minor Scales*, np, nd-4.
- Maccheroni, A.M. *Music Book: A Musical Reading*, np, nd-5.
- Maccheroni, A.M. *The Montessori Method: Music and the Child*. Battersea: Salesian Press, nd-6.
- Miller, J. K. "The Montessori Music Curriculum for Children up to Six Years of Age." Ph.D. dissertation, Case Western Reserve University, 1981.